

#### 第44回車座集会意見交換内容（高津区）

- 1 開催日時 令和元年9月2日（月） 午後6時から午後8時10分まで
- 2 場 所 高津市民談話コーナー ノクティプラザ2 11階
- 3 参加者等 参加者16名、傍聴者42名 合計58名

#### <開会>

司会：定刻になりましたので、第44回車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます高津区役所企画課長の勝野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の車座集会は、「「地域活動」への参加 一歩先へ」と題し、子育てや働き方改革などを一つの機会に、地域活動への参加、場づくり、仲間づくりなどについて、川崎市長と参加者の皆様が意見交換を行っていく企画としております。

本日の意見交換にご参加いただく方は、16名の方となっています。後ほど、第一部において順にご紹介させていただきたいと思います。

続きまして、行政からの出席者を紹介いたします。

福田紀彦川崎市長、高梨憲爾（けんじ）高津区長でございます。

#### <市長挨拶>

市長：皆さん、こんにちは。今日はお忙しいところ、車座集会にご参加をいただき、誠にありがとうございます。

本日のテーマが「地域への参加」ということですが、先週、自治会町内会の役員をされている市内の役員の皆さんとの意見交換があり、そこでお話した資料について、ちょっとだけ触れさせていただきたいと思います。

今、川崎市の人口は153万人程度になりますが、一番世帯数で多いのは、どんな世帯だと思いますか。一番多い世帯は、単独世帯です。これがどのぐらい多いかというと、改めてびっくりする数値でして、約43%が単独世帯ということです。夫婦お二人という世帯が17%、そして夫婦と子どもからなる世帯が27%と、3割にも満たないということです。

昭和60年には、夫婦と子どもからなる世帯というのは40%でした。ですから、何となくモデル世帯という、両親と子ども2人というイメージが、昭和の時代にはあったと思いますが、今やそういう世帯は3割にも満たないんですね。

逆に、単独世帯は、昭和60年は32%だったのに対し、今や43%になっていますから、この数十年間で劇的な変化が起きているわけですね。

もう一つ、数字を出しますが、インターネットで、1,500サンプルとった川崎市民アンケートの結果で、何が地域における課題だと思っていますかという質問に対して、一番多かった回答が「住民同士の関係が薄れている」であり、一番皆さん危機感を持っていることとなりました。しかし一方で、地域活動に関心があると答えた人は、わずか30%。そして、実際に活動していますと答えた人は、なんと15%を切っております。

というように、地域の関係が薄くなってきているということは、みんな危機感として何となく思っていて、地域活動に関心がある方が3割程度いらっしゃるなか、実際に参加している人というのは、いろんな理由があるのでしょうけれども、その約半分ということです。

そういった意味では、地域活動に参加している方々が少ないということは、地域関係・住民同士の関

係の希薄化を、さらに加速化させていく要因であるということですね。

でも、このままで本当にいいのでしょうかということ、本日お集まりいただいている皆さんは、それはまずいよねといただいているのではないかなと思います。

本日は、いろんな人たちが集まっていただいております、まさに企業の第一線で働いている方だとか、いろんなサークルなど地域で既に活動していただいている方々に、集まっていただいておりますので、いろんな意見交換ができるとうれしいなというふうに思っております。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

#### <本日の流れについて>

司会：それでは、本日の流れについて簡単にご説明いたします。

この後、5分ほどお時間をいただき、高梨区長から「地域コミュニティのさらなる活性化に向けた高津区の取組」について、ご説明させていただきたいと思っております。

その後、第一部として、本日ご参加いただいている方より、区内における子どもや子育てなどを機会とした地域活動の状況ですとか、民間企業における働き方改革などの取り組みやCSR活動、参加者の皆様のご関心事項などについても、会場全体で情報を共有したいと考えています。

第二部では、参加者の皆様が三つのテーブルに分かれて、テーブルごとに設定したテーマで、市長とともにワークショップ形式で意見交換を行いたいと思っております。

その後、意見交換の内容を会場全体で共有した上で、さらに意見交換を進めていきたいと考えております。最後に、福田市長から全体のまとめを行いまして、おおむね午後8時の閉会を予定しております。

それでは、「地域コミュニティのさらなる活性化に向けた高津区の取組」について、高梨区長より説明させていただきます。

#### <「コミュニティ施策」推進に向けた高津区の取組>

区長：意見交換に先立ちまして、高津区におけるコミュニティ施設、あるいは地域活動の考え方についてご案内させていただきます。

初めに、今、なぜ地域コミュニティかということをご説明します。

私たちの生活を取り巻く環境は、高齢化の進行ですとか、仕事と子育て・家庭との両立、自然災害等の災害の多発、個人個人のライフスタイルや価値観の多様化など、非常に大きく変わっているところです。

こうした中、私たち行政もさまざまな形できめの細やかなサービスの提供等には努めているところですが、ただそれだけでは、やはり市民の皆様のニーズを充足させたり、あるいは地域のそれぞれお持ちの課題というものの解決には、なかなか困難な状況に至っています。

そのため、これから私たちが持続可能な社会、あるいは本当に幸せな社会を築いていくためには、市民の皆さんそれぞれが、地域課題を自分事として捉え、そして、市民の皆様が新たな発想、新たな発案を行い、周りにいる方々と連携、協力をしながら、自分でできることを行っていく。そうしたことが大変重要になっています。その活動の源といいますか、土台、あるいは中心となるものが、地域コミュニティであり、今改めて考え直し作っていくということが必要になっているところです。

次に、私たち高津区が目指す地域コミュニティの姿ですが、本日もいろんな多様な方がいらっやっております。年齢も性別も、そして障害のあるなしに関わらず、そして個人だけではなくて、企業、団体の方、いろんな多様な方たちが御自分の持つ強み、特徴を活かしながら、それぞれの場で活躍できる、そうした社会というのを築いていきたいと思っております。

そのためのステップといたしまして、まずは、市民の皆様、誰もが自分の地域について学び、そして

自分の地域の未来について考え、また立場もそれぞれ違う方々のお話を聞き、そして自分の思い、考えを伝える、話す、伝えられる、そうした場や機会というものをつくっていききたいというふうに思います。私たちは、これを「まちのひろば」、あるいは「まちづくりカフェ」なんていうふうに呼んでおりますけれども、そうしたカフェを区内にたくさん作っていきまして、このひろばやカフェに参加した方々たちが、同じ考えを持つ人たちとつながり、そして一緒にこれをやろうよ、こうしたものやってみたらどうかな、そういった話、発想というのが、さらに発展をしていくということを期待しています。

また、自分のやりたいということをやろうと思った方々を地域活動の先輩の方々がそれを応援する、こういったものもいいよ、こういった情報があるよという形で応援していく、そうしたつながりや仕組みというものをつくっていききたい。パンフレットの中には、それをソーシャルデザインセンターというような形で表していますが、ソーシャルデザインセンターの基になるような、つながりや仕組みというのを広げて、市民の皆様が、今、なかなか地域活動に踏み出せないという方も後ろを押して、さらに一歩前にできる、地域活動に参加する、そうした社会を高津区としては作っていききたいというふうに考えています。

今日のテーマには、子育てと働き方改革というものを取り上げていますが、子育てというのは、人生の中でも一つのイベントというのでしょうか、大きな役割を担っているものだというふうに思います。保護者会ですとかPTA、あるいは子ども会、あるいはさまざまな子育てサークルというような形で、やっぱり子ども、子育てというのは、地域あるいは人をつなげる大きなキーワードというふうにも思っています。

また、働き方改革の面では、最近プロボノというような言葉も注目されております。会社に勤めている方が自分の特徴などを活かしながらボランティアに参加する仕組みではありますが、そうした観点からも、もう少し自分のできること、やりたいことを地域に目を向けてもらう。そうしたのも一つのヒントではないかなと思います。今日は、そういったものを取り上げてみたいと思っております。

最後になりますが、今日は企業の方もたくさん見えております。企業の方が地域活動に参加をする、関心を持つというのもだいぶ増えてまいりました。そういった意味では、団体の方と企業の方が、新たな連携というのでしょうか、同じ思いのもと、新たな地域活動が生まれる、そうしたきっかけになれば、この車座集會も大成功かなというふうに思っています。限られた時間ではございますが、忌憚のない意見をお願いいたします。

## <第一部>

司会：それでは、ここから第一部を始めさせていただきます。

第一部は、私のほうから順にお名前をご紹介しますので、それぞれ参加者の皆様、2・3分ですが、ご発言をお願いしたいと思います。

初めに、子ども・子育て分野において地域活動に行っている方から、活動内容とそこから見える課題などについてお話を頂戴したいと思います。

お1人目は、男女共同参画センターすくらむ21を拠点に、地域活動を行う「イキメン研究所」の江頭浩さんです。

江頭さん：今、ご紹介に預かりましたイケメンではなくて、イキメン研究所でございます。

この「イキメン研究所」の名前の由来ですけれども、この「イキ」は、地域の「イキ」が一つと、生き生きと活動するの「イキ」の二つの意味が主に込められていて、メンはもちろんメンズですね、生き生きと地域活動をするお父さんだけではなくて男性というくくりで活動をしています。

これまでの活動の内容は、最初に集まったとき、何が地域活動になるのかなと思ったときに、まず育児参加から始めてみないかという話が出まして、育児に参加することをいろいろ考えてみると、わからないことが非常に多いということで、僕たちで疑問をまとめながら、父子手帳「ちちしるべ」というものをまとめました。

まずこだわったのは、解答を求めない。一つのロールモデルを提示するのではなくて、いろんな悩みに向かい合ったときのヒント集となるようなものにつくってほしい。千差万別ある多様な生活環境の中で、一つの解答では多分対応できないだろうということで、ヒント集を目指しました。

そして、もう一つこだわったところで、デザインがあります。実はこちら、プロのアートディレクターがたまたまお父さんであり、友達でありましたので参加していただき、2016年のキッズデザイン賞で協会会長賞をいただきました。今、プレパパ、プレママに配ってありまして、周知のほうはかなり進んできたのかなと考えております。

こういった子どもの悩みから地域活動に参加していったんですけれども、次第に参加していく中で、課題も見えてきています。というのは、子どもは成長するんですね。今までと同じ悩みがずっと続くわけではなくて、成長したときに新たな悩みが出てくる。そういったときに、お父さん同士では会話ができないというところがあり、新しいメンバーを獲得するためにどういうふうに活動していけばいいか。そのあたりも、この中で、きょうの座談会でヒントをいただければと思って参加いたしました。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：次に、東高津中学校の見守り活動を契機に20年近く地域活動を行っている「東高津区中学校区おやじの会」の棚部哲男さんです。

棚部さん：こんばんは。棚部です。よろしくお願いいたします。

今お話しのとおり、東高津区中学校のPTAだったときに立ち上げた組織ではあるんです。どんな特徴があるかということ、かなり緩いもので、会長というものもなければ、会費も会則もない。でも20年ぐらい続いているということなんです。

もっと大きく考えると、地域をまとめてしまったものですから、東高津区中学校に限っていないんです。中学校区ということですから、地域にいるお父さんが中心なんです。極端に言うと、同じ小学校でも東高津区中学校に来ない子どもたちが結構いらっしゃる。私立に行くとか。そのお父さんたちもいいじゃん、やろうよといって、東高津区中学校に来させちゃったわけですね、結果的には、それがずっと続きながら20年近く。

何をやってきたかということ、もちろん中学校のお手伝い、電気が好きな人がいると、LANケーブルの接続とかをやらせちゃうと。校門のペンキが剥げてきたとなれば、ペンキ屋いるじゃないかと、おまえやれよと。俺、つき合うからと。そうやってやれる人たちがやってきて現在に至っているんです。多分中学校で一番大きな仕事したのは、ネット張りですかね。野球部の活動ができないということで、結構な工事でしたが、本当にこれはみんなで作ったんです。

ちょうど立ち上げたころは、中学校が結構荒れていて、20年近い前ですから、福田市長なんかは多分わかっているでしょうけど、殺人事件があったようなことがあって、それのちょっと後ぐらいだと思うんですけど、これはまずいなという、学校に来ている子も、勉強はしない、授業中歩き回る、サンダルで来ると、それが当たり前。

そんな子をまとめようということで、軽音楽、バンドを一緒にやったんです。そういう子たちは、要するに目立って、自分の居場所を探しているんでしょう、きっと。それをきっかけにして、子どもたちが少しは心を開いて卒業していくと。

その子たちが卒業しちゃいましたからね、じゃあどうするというときに、音楽を残しつつ、じゃあ何をやろうといったときに、一番大きな今イベントになっているんですが、今で言うと中央支援学校、前の養護学校ですかね、そこを会場に使えることになりまして、健常者と障害者、これもフックになりつつ、地域が開かれればいいじゃんということで、お父さん、お母さん、先生、みんながまとまって、今も十二、三年ですかね、音楽イベントが続いている。これが今大きな私たちのテーマで、これをどこまでいい形で伸ばせるかなということです。

最後に課題を一つ。次の時代を担う誰かがなかなか出てこない。俺は熱量があったんです。今は少し下がってきました。俺が下がるとみんなが下がると。俺、いつまでもやっていたくないんで、そろそろ代われと思っているんですが、なかなか出てこないのかなというのが現状です。

司会：続きまして、子ども食堂「菜の花ダイニング」の佐藤由加里さんです。

佐藤さん：ご紹介にあずかりました菜の花ダイニングを主催している佐藤と申します。

始めて約3年目になりますが、ありがたいことに年々参加者がふえて、1年目と2年目では、食べに来てくれる人が60%伸びているんですね。収益事業だったらどんなにうれしいんだろうと思うんですけども、収益事業ではないので、参加者がふえるイコール持ち出しが多くなるという、ちょっとあれっという結果にはなっているんですけども。

最初、始めたころは、相対的貧困というのが非常に問題になっていて、そんなにご飯が食べられない子がいるのかなという形でやり始めたんですが、実はそうではなくて、「孤食」は孤独な食事というふうに書くんですけども、よくよく聞いてみると、お家のみんなで同じものを食べない。お母さんは何、お父さんは何、私は何、ばらばらに食べたりすることであったり、ご両親がお忙しいので、買ってきたものがふえてくることで「濃食」となったり、いろんな「こ食」があるねと。じゃあ私たちができることは何だろうといったときに、現役の調理師さんとかもいたりするので、じゃあふだんやらないような手間暇かけた食事をみんなに提供して、本来食事は美味しいんだよ、自分でつくったら美味しいんだよということをみんなに広めていきたいと思いますというふうな活動に変わってきています。子どもだけじゃなくて、地域のお年寄りも来てくださいということで、実際来ていただいていますし、最初は保護者の方と一緒に来ているんだけど、そのうちお子さんたちだけで来るようになったりとか、そういった形で変わっています。

子ども食堂をやる意義というのは、貧困の人だけを助けるんだったら、こんな活動はなくなればいいと正直思っていますけれども、そうではなくて、地域の人たちの居場所になって、いろんな人と出会える場所になるんだったら、どんどん続けていきたいなというふうに考えています。

課題としては、今、助成金をいただいて活動しているんですが、いかんせん、大人300円、子ども100円。かなり厳しいので、いただくたびに、自立しましょうねというふうに審査員の方から言われるんですけど、自立のヒントとかその辺をちょっときょう持って帰れたらうれしいなと思って参加しました。よろしくお願いします。

司会：続きまして、子ども夢パーク「支援委員会」の川瀬早紀子さんです。

川瀬さん：ご紹介にあずかりました川瀬です。よろしくお願いします。

私は、川崎子ども夢パークの魅力とか、そこに集まる人、子どもの生きる力を育む、遊びの力に魅せられて、微力ながらお手伝いできればと思って、今年の4月から川崎市子ども夢パーク支援委員会に入らせてもらったんですけど、ほかにも自主保育という活動を2010年からやっております、そ

れで3人の子育てをしてきて、川崎市にも幼稚園、保育園と並んで認められているすばらしい活動なんです。広報などにも力を入れて、少しずつ認知が広まってはきているんですけど、乳幼児の育ちの場として自主保育もあるということを知っていただきたいなというふうに思っております。

自主保育のぽけっとの拠点でもあった川崎市子ども夢パークにも、2010年から通っていて、去年は、子どもたちの発案で自分たちの育った夢パークに、世界一のレゲエダンサーI-VAN OKINAWAさんと呼んで、みんなで楽しみたい、世界を広げたいということになり、子どもたちが「Ivanと夢ばでヤーマンプロジェクト！」というチームを発足して、子どもたちで夢パークに思いをプレゼンして、夢パークと共催でイベントをしました。

企画立案、資金集め、準備、当日の運営も夢パークの関係者ほか、たくさんの方の応援をいただきながら、子どもたちで行うことができました。約8カ月の準備を経て、今年の2月にイベントを行ったんですけど、150人もの方に集まっていたいて、レゲエダンスやI-VANが世界の貧困地域の子どもたちにノートとペンを届け、教育のきっかけとしている「One Pen Project」という活動の話聞いて、最後はプレーパークで思い切り遊んで、大いに盛り上がることができました。

プロジェクトをやり切った子どもたちは、頑張れば何でもできると思ったと言って、この経験はかけがえのない宝物になったと思います。夢パークは、このように子どもたちがやりたいを大事にしている場所で、本当に日々体現している場所で、すばらしい場所だなと思っております。

支援委員会というのは、夢パークの理念をもとに子どもたちの居場所づくりをサポートするために、スタッフとともに運営にかかわる団体なんですけど、夢パークとか自主保育の出会いで、遊びやプレーパークの持つ力とか居場所が持つ力、それがどのように子どもに影響していくかを実感していく中で、禁止事項が多くてやりたい遊びができない公園ではなく、子どもがやりたいができる場所を夢パーク以外にも増やせればなと思っております。

現在、自主保育の拠点、たまがわのびっこの拠点である、高津せせらぎ公園というのをプレーパークにしたいなという夢を持っています。そのために少しずつ活動をしていきたいので、応援していただきたいなと思っております。

今度は、自主保育の団体知育連の主催で、自主保育のライド上映とあわせて、「さとにきたらええやん」という大阪の尼崎で38年続く子どもたちのつどいの場「こどもの里」を舞台にした映画の上映を11月20日に、夢パークで行うので、ご興味がある方、ぜひいらっしゃってください。

今回参加させてもらって、子どものやりたいとかやってみたいができる場所、やりたくないも尊重される場所が、地域にもっと増えればいいなというふうに思っているんで、皆さんの話をお聞きしたいなと思っております。よろしく願いいたします。

司会：続きまして、久末のグループホームで小学生を対象とした遊び場を開催している「くれよん」の森合牧子さんです。

森合さん：ご紹介にあずかりました森合と申します。よろしく願いいたします。

私たちの活動を始めたきっかけは、私の住んでいるマンションの並びのお部屋の方が、小学生たちがすごくお家に来ちゃって、来ないでくださいと言っても来ちゃうんで困ってますというお話をされていて、土日構わないんだということ、夜遅くまでなっても帰らないんだということということが問題かなとは思っていました。

どうしたらいいんでしょうかねと聞かれても、家に来なよというのも、私はちょっと言えなくて。でも、その子たちが何をやっているかという、玄関先にたまって、自分たちの持っているゲーム

をやっていると。

それは本当は、夢パークに行ってやったら、そんな全然迷惑じゃないんですよ。こ文に行ってもいいんです。だけど、遠いんですよ。小学校の低学年生が自力で、行くにはちょっと遠い。こ文は一中学校区に一つですよ。私たちが住んでいる場所からだ、やっぱりちょっと難しい。1年生、2年生、3年生、難しい感じです。

つまり場所がないんだよねということで、じゃあ場所をつくったらいいんじゃない、私が借りるよ。みんな遊びに来なよということをやりたいなというふうに思いました。それはそんなに簡単なことではないんだなということがやり始めてわかったんですけども。それでも、いいじゃないですかと言って、区の保健師さんとかが応援してくださって、場所を借りて今の活動を始めることができました。昨日の9月1日が1周年になりました、1周年の記念で、ゲストを呼んで楽しい時間を過ごすことができました。

助成金をいただいております、助成金によって実現していることです。9月1日というのは、皆さんご存じのとおり、日本の子どもたちが一番自殺する日です。その日に、私たちの活動が1周年を迎えて、みんなで楽しい時間を過ごせた。それは、一つ勉強も絡んでいることで、化学をちょっとおもしろく勉強してみようよというイベントでした。

学校じゃない場所でも、実は学びはできるんだよ、実は結構楽しいんだよ。そのメッセージが子どもたちに届くことで、少し楽になる子もいるかもしれない。そこにいたのは11家族だったんですけども、その11家族の人たちが、もし、こんなことをやってきたよということ、ほかの子たちに話していたら、少し楽になる子もいるのかもしれないなというふうに思っています。

活動頻度は、毎週月曜日の2時間です。それでどれぐらいのことができるんだよと言われると、まあ確かに疑問ではある。毎日やっているこ文があるのに、2時間月曜日あける必要あるのというのは、あると思うんですけど。ただ、私たちは、母親なので、自分たちと同じ学校に通っている子たちの顔を私たちが見て、「どう、最近どんな感じ、学校」とか「ああ、あの先生、こんな感じだよ」みたいな話ができるという場所があるということは、私はとても重要なことだと思っていて、お仕事が忙しいお母さんが多い中で、平日の夕方その場所に遊びに来られる場所がある、開いているということは、とても重要なことだと私は思っています。

司会：続きまして、「下作延第一子ども会」の緒川昌史さんです。

緒川さん：ありがとうございます。下作延第一子ども会の緒川です。

子ども会に入ってから、多分15年ぐらい役員をやらせていただいているんですけども、その間、毎年のように行事を幾つかこなして行って、子どもたちもたくさん卒業していきました。子どもたちがもう、うちの一番上の長男が二十歳なので、それぐらい一緒に卒業させていった子どもたちがいます。

まちで歩いていたり、どこかお店に入ったりすると、実はその子ども会の卒業生の子がアルバイトとかをしていたりして、声をかけてくれたり挨拶してくれたりすると、非常にうれしいので、それを励みにやっています。

入ったきっかけは、子どもが保育園の年長のときの行事で親子キャンプというのがありまして、聞いた話なんですけれども、お母様方がその日1日はお父さんに子どもを預けたいということで発足して、最初は、全部お母様方が段取りをして、その日だけ、じゃあ子どもたちのことをお父さんよろしくねといって、お茶会か何かをするような感じの発足だったらしいんですけども、しばらく

すると、いやいやこれ企画から自分たちでやろうという話になったみたいで、うちの子もその保育園に入った結果、親子キャンプを通じていろんなお父さんと知り合ったりして。なので、そのお父さんが子ども会もやっていて、巻き込まれるように子ども会のほうに入りました。

なかなか最近子ども会でも、子どもたちが習い事ですとか野球、サッカーにとられてしまったり、とられてというのもおかしいですけども、なかなか行事に参加してくれなかったりとか、今度親子運動会もありますけれども、肝心の足の速い子は、サッカーのほうに行ってしまうとか。そんな流れもあるんです。けれども、できるだけたくさん子どもたちが子ども会にも参加していただけるような、そして、ここの地域に生まれて住んでよかったなと思えるような、そんな子ども会、町会を目指してやっています。

今日参加の団体としては、子ども会の肩書で参加させていただいているのは、ちょっと私だけみたいなので、うちの子ども会以外でも、何か皆さんの地域にある子ども会と、何かジャンクションのかけ橋にもなればいかなと思っていますので、よろしくお願いします。

司会：続きまして、地域活動への動機づけにつながるような活動を行っている方をご紹介します。

初めに、「社会的処方研究所」の西智弘さんです。

西さん：よろしくお願いします。本職は、川崎市立井田病院でドクターをしていますので、市の職員なんですけれども、僕はがんが専門なんですけど、がんという病気にかかったときに、多くの人が孤立してしまう。社会からも孤立してしまう、家族からも孤立してしまう、会社からも孤立してしまうとか、そういういろんなことがあって、そういう方々をたくさん見ていて、いわゆる社会的孤立というのは、どういうふうに解消できるんだろうかということを考えて、最初に、それで病院の外に一般社団法人プラスケアというのを立ち上げて、そこでこのパンフレットをお配りして、暮らしの保健室というものを運営する会社をつくりました。

いろいろとやっていく中で、イギリスの仕組みである社会的処方という仕組みを知って、その社会的処方という仕組みは、具体的に言うと、例えば皆さん、ドクターにかかったことあると思うんですけど、そこに行くと、例えば眠れないというおじいさんが、ある診療所に行きましたと。日本のシステムだと、いわゆる3時間待ち3分診療の世界でいくと、「眠れないんです」と言うと、「じゃあ睡眠薬飲んでおいて」と。「次、2週間後に来てくれたら続き出すから」と言われるわけですよ。

でも、よくよくそのおじいさんの話を聞いたら、実は半年前に奥さんを亡くして、それまで奥さんに連れられていろんなところへ出かけていったんだけど、家に引きこもるようになってテレビばかり見ていると。そうすると体も使わなければ頭も使わないから眠れないという話なんです。

それに対して、それをよくよく聞くのはいい医者ですよ。だけど、それに対して聞いた上で、大変ですよと言うしか、今の日本においては無いんですよ。でも、そのおじいさんの話をもう少し聞いて、実はそのおじいさんは、昔奥さんと一緒に花屋さんをやっていたということがわかりました。

イギリスの社会的処方の仕組みで言うと、じゃあこのおじいさんと、まちで花壇とかを整備している市民サークルとかがあるという情報を知っていたら、ここをマッチングさせてあげたらとドクターが頼むわけですよ。「申しわけないけど、何とかさん、ちょっと僕の知り合いで、何とかというサークルがあって、ここ、人が足りなくて困っているんだわ。あなたもともと花屋さんなんでしょう。助けてあげてくれないか」と言うと、「じゃあしょうがねえな」と言うわけですよ。そうしたら、そのおじいさんは、外に出ていくようになって、頭も使うし体も使うし、役割もできて生き生きされるようになって、結局診療所に来なくなる。結局薬なんか使わなくなると、おじいさんは夜眠るようになって、健康になりますと。そういう仕組みがイギリスにあるわけですよ。



これがすごくおもしろいなと思って、社会的孤立というものを解消していく仕組みとして、僕らドクターとかが中心となって、市民の方々と協力して、そういう地域資源をつないでいくということを通して、人を健康にしていくという、その社会的処方という仕組みを日本に取り入れていくというために、その社会的処方研究所というのを一般社団法人プラスケアの中につくって、それを去年の6月ぐらいから活動を始めているという感じです。

この社会的処方を取り入れてやっていこうというのは、もう今、川崎だけではなくて、もう全国に広まって、多分ニュースとかでも社会的処方という言葉は宇都宮の医師会が取り組むようになったとか、今度来月から、それは僕らと一緒にやるんですけど、鹿児島と熊本から呼ばれていて、僕らと一応提携してやるという話になっていて、全国にも社会的処方という波が広がりつつある。だから、結局でもそれは僕らドクターだけでできる話ではないので、皆さん、市民の力をつないで、それでヘッドアップをつくることでそれが生きてくるという話なので、ぜひ皆さんと協力してやっていきたいなというふうに思っています。よろしくお願いします。

司会：続いて、大山街道沿いの自宅を会場として「おとなの寺子屋」を開催している平原ちひろさんです。

平原さん：初めまして。おとなの寺子屋をやっております平原ちひろと申します。よろしくお願いします。

ふだんは、いろいろな活動を知ることが余りないんですけども、こういう場に呼んでいただいたので、いろいろな活動を勉強しながらと思っています。よろしくお願いします。

おとなの寺子屋は、親子のキャリア教育というのをやっておりまして、毎月1回、私の自宅で勉強会を行っています。10年後の2030年には、今ある職業のうちの6割がなくなるというふうに言われていて、私も、中学生と小学生の男の子を2人育てているんですけど、これからの社会がどういふふうになっていくのかなということを勉強したいということと、子どもが将来どんな仕事に就くのかというときに、そもそもどんな職業が残っているのかとか、どういふ新しい職業が生まれるんだろうかということを勉強したいと思って立ち上げました。

もともとは、二子新地に駄菓子屋さんで木村屋さんというところがあるんですけど、そこの方が大家さんで、地域の価値を高めたい、地域の活性化を図りたいということで、不動産屋さんのNENGOという建築プロデュースをされている会社なんですけど、何かできることはないかなというふうに考えていましたら、私たち夫婦と出会ったんです。私と夫は、ともに大学の教員で、人にもものを教えることがすごく好きでしたので、じゃあ自宅を開放して大家さんから自宅を借りて、そこで勉強会をしましょうということで発足しました。

6月には、政治家になるには講座ということで、福田市長に来ていただきまして、どうしたら政治家になれるのか、小さいころはどんな小学生だったのかということをお話していただきました。福田市長が、考古学者とかお花屋さんになりたかったんだというお話から、政治家というのはこんなに魅力的な仕事なんですよということをお話してくださいました。

私も長男が中学1年生なんですけど、政治家に全く興味がなかったんですけど、最近雑誌の占いで将来向いている職業、政治家と書いてあったら、うれしそうに私に報告してくれるんです。「政治家になりたいの」と聞いたら、「いや、別に」と言いながら何か笑っているので、私自身すごくお話が伺えてよかったなと思っています。

ほかにも、サッカー選手になるにはというので、フロンターレの元選手の方ですとか、今月はAIBOを作ったソニーのロボット開発者の方、それから車椅子のダンサーの方とか、3浪してお医者さんになったという方からどこまで夢を諦めないで頑張れるのかみたいなお話もしてもらいたいなと思っています。

それぞれ地域活動をやるには、メリットがないといけないと思うんですが、私たちはこんなふうに行っています。

まず、私どものメリットなんですが、おとなの寺子屋を自宅でやることで、家賃を下げてもらっています。具体的には、4万円ぐらい家賃を下げてもらっていて、そのかわり月に1回自宅を開放して、地域のために何かをやってくださいというふうに言われています。

大家さんにとってのメリットは、地域の価値を上げるということで、おとなの寺子屋をやっている二子新地というまちを魅力的にしてほしいというのが、大家さんのメリットです。

不動産屋さんは、そういった価値ある地域をつくっているという企業だということで、価値を上げていращやるんじゃないかというふうに思っています。

課題もいろいろありますが、先ほどから皆様言っていました人材の問題ですとか、財源の問題ですとかがあります。

あと寺子屋を一生懸命やって、毎回40人ぐらい人が来てくださって、頑張ってはやっているんですけども、そういった活動に親も子どももそうなんですが、忙しくて来られないという方が非常に多いのが残念だなというふうに思っています。このあたりの価値観の変え方もそうなんですけれども、塾だったり部活にばかり行っていないで、もうちょっと地域活動に参加する子どももつくっていきなというふうに思っています。

また皆様とディスカッションできるのを楽しみにしています。よろしくお願ひします。

司会：本日は、区内の民間企業から6名の方にご参加いただいております。働き方改革や女性の活躍推進の取り組み、CSR活動の内容、また、仕事と育児の両立などに関するご自身の経験などについて、順にお話を頂戴したいと思います。

初めに、株式会社富士通ゼネラルから、片原純さんです。

片原さん：富士通ゼネラル人事統括部の片原と申します。

今まで皆さんが非常に高い志だとか理念のもと、活動されている話を聞いて、一企業人の私が話をするのは少し心苦しいですが、ご紹介させていただきたいと思ひます。

まず、富士通ゼネラルという会社を簡単にご紹介させていただきますが、本社は高津区にございまして、空調機、情報通信、電子デバイスの事業をやっている会社になっており、メインはエアコンをつくっている会社になっております。

私どもの会社で働き方改革を推進している人事をやっていますが、その根幹としては、企業理念の中に、「人を思い活かす」というフィロソフィーが入っています。そのフィロソフィーに基づいて、さまざまな働き方改革の施策をしています。

大きく三つ分かれておりまして、ワークライフバランスの向上やD&Iの推進、ダイバーシティ&インクルージョンの推進、健康経営の推進という三本柱で働き方改革を推進しています。

アイテムとしては、36協定、いわゆる残業時間の上限規制を引き下げていくことすとか、週1回定時退社日をつくって皆さんに帰っていただくとか、年次有給休暇を上期・下期でそれぞれ、皆さん好きに2日ずつ設定してくださいといった施策を打っております。

また、D&Iの推進に関しては、女性の方向けの研修。当社も女性の方、あるいはシニアの方、外国人の方、さまざまありますが、まずは、マジョリティーである女性の方に向けた研修をしています。ほかにも、当社の社外取締役の中に女性の方がおり、こちらの方と女性のリーダークラスとの座談会を実施したりしています。

健康経営については、全社員に対して健康面談を産業医のほうから実施をしています。ふだんの健康

状態の面談をすることによって、早期にリスクを感知するような取り組みをしています。ほかにも、従業員向けの健康教育、卒煙プログラム。これは幼稚園の卒園ではなくて、たばこを卒業しましょうというプログラムを会社として提供したり、ダイエットイベントの実施をしています。

こういった活動を通じ、国のほうからホワイト500に認定されたりですとか、神奈川県のマイMEーBYOカルテ、企業対抗ウォーキングにおいて、神奈川県で2年連続受賞しております。当社の場所が溝の口と新城の間にあるものですから、どちらからも1.6キロぐらい距離がありまして、社員皆さん、出勤時も退勤時も歩いていますので、平均して非常に歩数が多いというのが一つ上げられまして、もし本社が移転してしまうと、恐らく首位は陥落しますので、この点はぜひ本社はこのままこちらに置いておきたいなということがあると思います。

いろいろ働き方改革をやっていますが、単純に残業の時間を下げるとかの取組をやっているだけでは働く者の気持ちは向上してきませんので、じゃあどうするかという点を、二つほどご紹介します。一つは、全社のアカスリ活動というものをやっています。これは、事業活動での徹底した無駄取りを進めていまして、例えば今までやってきた業務をこれ本当に必要なのかというのを全社で横串を通して、例えばある部署でつくった資料を違う部署に出して、本当に要るのかというのを全社的な観点で必要性を吟味し、無駄だと判断されれば、それはなくしていくと。そういった活動を通じて、単純に残業時間を下げるだけじゃなくて、本当に必要な業務かを判断して、業務を削減しているというものです。

また、10%ルールというものをやっており、所定労働時間の10%を、社員の好きな活動、例えばイノベーションの創出だとか、個々人の成長につながるような活動を従業員が申請に基づいて活動することをやっております。こういったふうに、単純に時間を削減するだけじゃなくて、従業員が働きやすい、働きがいのある会社になるような施策を打っています。

続いて、地域貢献活動については、隣にいる岡田からご紹介させていただきます。

司会：同じく富士通ゼネラルから岡田由則さんです。

岡田さん：同じく富士通ゼネラルの総務部の岡田です。よろしく申し上げます。

今、片原のほうからあったように、会社の地域貢献ということでちょっと一言お話しさせていただきますと、私どもの会社は、毎年8月にサマーフェスティバルというのをやっております、これがことして64回目。先月の20日と21日、2日間にわたってやったんですけども、これがなかなか地域の皆様からも好評をいただいております、今回の開催では2日間の開催で約4,300人お集まりいただきました。

このサマーフェスティバルは、私が生まれる前からずっとやっていたというような勘定になりますが、もともとは、地方から出てきたご子息とかが会社にいっぱいいらっしゃり、そういう人たちのためにということで始まったというふうにも聞いております。

最近では、CSR、企業の地域貢献ということで、ふだん地域の皆様にすっかりお世話になっている会社でございますので、一つの恩返しというような形でサマーフェスティバルというのを開催させていただいています。

模擬店や抽選会、盆踊りなどのほか、フロンターレの選手の方に来ていただいたりとか、歌を歌っていただいたりとか、いろいろなことをやりながら2日間やらせていただいているところです。

それから、もう一つ、私自身の地域との関わりですが、川崎のボーイスカウトの39団の育成会で活動させていただいています。市長のホームページを見ると、市長もボーイスカウトのご経験者であるということで、大変うれしく思っているんですけども。

今年も先月、山梨県にキャンプに行ってきたばかりですが、やっぱりボーイスカウトも、入団者がだんだん少なくなっている傾向がありましたので、今年度については、いろいろ上部団体からのお願いを回していただきながら、地域の小学校や公的機関へチラシを入れさせていただいて、4, 0 0 0枚ぐらいピラを配って、5名ぐらい新たに入らせていただくことができました。

やはり人間形成をするに当たって、ボーイスカウト活動というのは、非常にすばらしいものだなというふうに私自身思っており、それらの活動をもっと底上げするために、より多くの参加者を募るとかそういったことをやっていきたいなというふうに考えています。今日、ご参加いただいた皆さんといういろんな面で意見交換させていただければなというふうに思っております。よろしくお願ひいたします。

司会：続きまして、株式会社NECプラットフォームズから平山皇江さんです。

平山さん：初めまして。NECプラットフォームズ株式会社人事総務部の平山と申します。

私は、普通の主婦として、仕事はオフィスサポートの業務と総務窓口が主な仕事となっています。今は、未就学児、小学生、中学生の3児の母としても仕事と子育ての両立に追われています。会社制度を利用して、育児休職や時短勤務を取得し働いています。今は、多目的休暇制度もありますので、子どもの傷病のときや学校行事にも参加しています。

復職する前は、仕事と子育ての両立にとっても不安がありました。このような会社制度があり、働き方改革としても女性として結婚、出産後も働ける場所があるということ、働きやすい環境が整っていることを実感しています。

今後は、スマートワークといって、場所や時間も主体的にデザインする形で、テレワークも推奨されていますので、今後利用していきたいと思っています。

会社でのCSR活動としては、エネルギーの使用量の削減を目標管理とされています。事業所内では、養護学校のスクールバスの発着の提供、管理をしています。また、環境コミュニケーションとしては、月1回の事業所周辺の清掃は、社員、派遣社員含め、事業所勤務者を募って昼休みを利用して行っております。地域の方と接する機会が余りないのが現状ですが、以前は地域交流もあったと聞いています。今後も地域への参加、交流のきっかけになればと思い、本日参加させていただきます。よろしくお願ひします。

司会：続きまして、日立システムズからAさんです。

Aさん：こんばんは。日立システムズのAと申します。本日は、参加させていただき、ありがとうございます。

弊社は、情報サービスを提供している会社です。本社は品川区の大崎にありますが、私は川崎市坂戸にあるKSP内の、溝の口オフィスを構えています。あと、もう一つの事業所として、高津の駅のラウンドワンの横に多摩川オフィスを構えています。多摩川オフィスは、主にシステム開発をメインに社員が500人から600人ぐらいおり、KSPは、600人から700人ぐらいの社員がおります。そういう会社なんです。実際、地域の活動というのに取り組んでいないのが現状であります。唯一、1, 300、1, 400人ぐらいの社員が高津と溝の口界わいで飲んで帰るぐらいのことしか今はできていないのかなと思いますけれども、今日、この場で皆さんがどういった活動をされているかをお聞かせいただいて、何か弊社としても協力できることがあればと思って参加したということもあります。

あと、私個人の話ですが、私も9歳と2歳の子どもがおりまして、会社の制度をフルに活用して働い

ております。プロフィールシートに書かせていただきましたが、ちょっと手前みそでもありますが、弊社はとても制度が充実していて、とても働きやすい環境です。私も女性活躍を推進してきているこの世の中に乗かって、在宅勤務と裁量労働制度というのを使わせていただいて働いていますが、そういった制度を活用しながら活躍していきたいなと思って日々働いております。

あとは、私が住んでいるところで、自治会の規模ですけど、役員として会計を2期やっけていまして、やっぱりどうしても問題になっているのは、高齢化です。もう会長も80近い方が何年も何期もやっけていとか、そろそろやってくれないかと言われても、やっぱり働いている30代、40代は、なかなか協力ができないといっているところが問題ともなっています。

あとは、子ども会もあります。とても小さいんですが、やっぱり今後子どもたちがそこで住んで成長していってもらうためには、とても必要な活動だと思っています。夏祭りを開催したり、いろいろ企画してやったりもしているんですけども、今日、皆さんからお話を聞いて、どうしたらもっと活発にできるかなとか、30代、40代でも、どうしたらもっと協力できるかなとか、その辺もお聞かせいただければなと思っておりますので、よろしくお願いします。

司会：続きまして、イトーヨーカドー溝ノ口店から竹井浩樹さんです。

竹井さん：イトーヨーカドーの竹井でございます。

先ほど、我々は福田市長からお話があったような世帯の変化に対して、衣食住をどうサービス、商品を提供するかということの本業としているんですが、今日の趣旨から申し上げますと、二つ特徴的なことがあり、一つは、非常に女性が多い職場ということです。約300人のスタッフがいるんですけども、8割は女性でございます。我々実は32年営業させていただいているんですけども、10年、20年と、非常に長くお勤めいただいている方が多くて、理由を聞くと、土日に仕事があるので、お父さんが休みで子どもの面倒を見られるから、実はそういう意味では働きやすいというふうに言ってくださっている方がいました。先ほどイキメンという話がありましたが、非常に遠回りですけど、少しイキメンづくりに貢献できているのかなと、ちょっと感じました。

二つ目が、やはり人が集う店、場所を持っているということが特徴的なんです。そういうことであらうと、大きなところを構えて、いろいろな意味でご迷惑もおかけしているとは思いますが、それでも地域にどれだけ貢献できるかということで、例えば高津中学の吹奏楽部、これは全国的なコンクールでも賞をとるようなところだと聞いたんですが、ご招待して、演奏会をしたところ、ご家族も涙を流しながらごらんになっている方がいらっしゃいました。そういった形で、いろいろ子育てとか家族のきずなとか、いろんな世帯の方が喜んでもらえるような場所を提供するというので、少しでも貢献できるかなと、今それを強めたいというふう考えております。

そういう意味では、今日ご参加の皆様と場の提供ということで、何らかのつながりが持てる可能性がもしかしたらあるかもしれませんし、また、そういったことでの地域での貢献の仕方というのを今、高津区の皆様とも打ち合わせをさせていただいているところですので、どうぞよろしくお願いいたします。

司会：続きまして、アマゾンジャパンから山本薫さんです。

山本さん：アマゾンジャパンの山本と申します。今日は、貴重な場にお招きくださりましてありがとうございます。

アマゾンと言えば、通販がおなじみなんですけど、会社がどうなっているのかというのはおなじみじ

やないと思うので、簡単に申し上げますと、僕らの通販事業は、来年でちょうど日本に進出して20周年というタイミングを迎えます。今、世界に19カ国に展開しているんですが、通常の一般企業さんと違うところは、会社に地域貢献活動を行う組織があるんです、アメリカ本社に。19カ国全部にコミュニティという部署があって、地域貢献活動を推進するという部署があります。じゃあ、その組織をどういう人がマネージしているかということ、以前のアメリカ大統領のオバマさんの大統領報道官だったジェイ・カーニーさんという人がいますが、その方が我々の組織のトップで、ジェフ・ベズと連携して、地域貢献活動についていろいろ話し合うというところがあり、本当アマゾンは大企業なんですけど、セールス活動以外において一番力を入れているのは、世界中での地域貢献活動です。

じゃあ、地域貢献活動なんで、どうやったら従業員の皆さんが地域社会に積極的に関わられるかというところがありますが、会社として出発地点にしているのは、地域貢献活動の前に働きやすい職場環境づくりというテーマがあります。働きやすい職場環境というのは、いろんな意味でいろんな定義があるんですけど、働きやすい職場環境ができると、従業員というのは地域にかかわっていくという考えのもとに、今いろんなプログラムを推進しています。

日本国内においては、従業員1,000人以上を抱える拠点が、おかげさまで今16カ所になります。それぞれの地域においての、地域貢献というのがあり、こういう形で僕自身も毎週いろんな地域にお邪魔して、いろんな意見交換の場に参加させていただいていますので、一緒にお話しさせていただけたらなと思っております。今日はよろしく願いいたします。

司会：続きまして、企業だけではなく、本日は、区内で農業を営みながら地域活動への関心を高くお持ちの方にもご参加いただいております。木所農園の木所大輔さんです。

木所さん：木所農園の木所と申します。唯一農家枠で参加させていただきました。

私、ここからほど近い10分ぐらいのところにあります下作延というところで農業を営んでおります。先ほどのお話にもありましたが、二子新地の木村屋さん、駄菓子屋さんなどに野菜を卸させてもらったり、小杉の子ども食堂に野菜を提供させてもらっています。

私は、農業を営む上で、一つ目標を掲げておまして、ただ野菜を販売するだけではなくて、地域に必要とされる農園になりたいなと考えまして、あらゆる活動に積極的に参加しようと考えております。地元小学校の授業で、野菜の栽培の講師をさせていただいたり、多分みなさん知らないと思うんですが、川崎市との協定で、いざ震災があったりとか何かあったときに、農地を開放して避難場所になったり、復興のための資材置き場に農地を提供していこうという形など、いろいろ考えております。

また、今年ですが、働き方改革ということでは、川崎市のモデル事業に採択されまして、野菜の自動販売機があるんですが、川崎市のIT企業と連携いたしまして、自販機にセンサーを取りつけ、その場に行かなくても手元でスマホとかで販売状況がわかるという形で取り組みをさせていただきました。今回こういった場に招いていただきまして、何かまた新たな活動のヒントになればいいなと思ひまして、参加させていただきました。よろしく願いいたします。

司会：最後に、高津区役所地域ケア推進課から岡部慶子さんです。

岡部：皆様、こんばんは。高津区役所地域ケア推進課から参りました岡部と申します。

小さなお子様から高齢の方まで、誰もが住みなれた地域で安心して暮らせる、そういう地域を目指す「地域包括ケアシステム」という考え方があるんですが、そのシステムを構築するという部署におります。その中で、健康づくりや、生きがいくづくり、地域とのつながりを大切にしていこうという取り

組みを進めているところです。

今日は、地域活動を既にされている方、地域貢献をしてくださっている企業の方々ということで、一緒に参加できるということで大変楽しみにしてまいりました。

また、私自身は、小学生の子どもを育てている母親でもありまして、子育てを通じて、地域の方々とお話をできる機会というのが増えました。子育てというのが、地域につながる一つのきっかけになる、そういった力のようなものを、可能性を感じております。ただ実際、なかなか子育てと仕事と両方していて、地域活動にまでなかなか行けないというのが実際のところで、今日は、そういった中でも地域に参加できるような、何かヒントをこちらの会でいただければ、皆様と一緒に考えられればと思っ

て参加しました。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：以上、16名の方からいろいろとお話を頂戴しました。

市長からコメントをいただきたいところですが、時間のほうが大分押しておりまして、市長には、また後半でお話を頂戴したいと考えております。

ここで第二部のワークショップの準備をさせていただきたいと思えます。スタッフが設営を行いますので、準備が整うまでしばらくお待ちいただきたいと思えます。

#### <第二部>

【ワークショップ】※3つのグループに分かれて、ワークショップを行った。

司会：皆様、活発に議論をいただきありがとうございます。時間が大分押している都合上、ワークショップについては、ここまでとさせていただきたいと思えます。

それでは、各テーブルにおける意見交換の内容を会場全体で共有したいと思えます。Aテーブルから順に発表をお願いします。

#### (Aテーブル)

Aテーブルでは、「社会人による地域参加のきっかけづくり」をテーマに話し合いを行いました。これまで、こういった形で地域の活動に参加をしたかという話の中で、保育園の保護者のつながりですとか、学校のPTAなど、子どもを介したつながりをきっかけとして、それが継続をしていることが多いという話がありました。また、「つながりを広げる」という課題については、気の知れた人を一本釣りではないですが、こういった会があるよ、というように誘い合って、地域活動への参加が広がったという例が非常に多いという意見がありました。

また、地域活動になかなか参加できない理由としては、やはりどうしても時間的な制約が挙げられました。会社で仕事をし、家庭もあり、お子さんの面倒を見たりと、どうしても自分で自由になる時間がないということが、一步を踏み出させない大きな理由になっているように思えます。

逆に、現在、参加できているという意味では、先ほど働き方改革の話がありましたけれども、会社ぐるみで定時で帰ることができる環境を整備いただき、自分の時間をつくって参加をしているというお話でした。

また、実際に参加をした意見としては、いろいろな面で顔のつながりができることによって、今度こういったイベントと一緒に参加しようよと、次第に顔見知りが増えている。そうした意味では、次に何か活動するときも、ハードルが低くなっているというメリットがあるという意見がありました。

今後、地域活動への参加を一步踏み出すためにはどうしたらよいかについては、いろんな活動をするにあたって、平日にやっていたり、いろんな時間的あるいは場所的な制約があって、自分が行きたい

ときに、行きたい会を見つけていけるよう、もっと気軽に好きなときに好きなところに参加できるような、フリーな会がもっとあると参加しやすいんじゃないか。そういったものをもっと増やしていくほうがいいんじゃないかといった意見がありました。例えば、参加する会のスケジュールがネットで見られたり、あるいは自分の好きな時間に気軽に行けるというような制約が少ないような会がもっと増えていけばという意見で、最後まとまりました。

#### (Bテーブル)

Bテーブルでは、「活動団体同士の気軽なつながりづくり」と、「活動のための地域人材の発掘」をテーマに話し合いました。

まず、メンバーからはじめに出た感想として、他の方々がいろいろな活動をされていることを、実は知らなかったということでした。活動する団体同士がつながるためには、まずお互いの活動の中身を実際に知ることが大事で、その中で、活動している人の顔を見た上で、こういうことを一緒にやってみたいという流れが、活動団体同士の気軽なつながりづくりに効果的ではないかという意見で集約しました。

もう一つ、地域人材の発掘ですが、これはどの団体も苦労しているところでした。それに関してもいろいろ話をしましたが、いろいろな活動自体を知らないとやはりその活動に入っていく人が少ないのではないかと。むしろ自分たちの活動を知ってもらうためにも、自分たちの活動を伝える手段がいろいろと必要ではないかという意見が挙がりました。

その中で意見として、いわゆるネット環境も必要なんですけれど、チラシを置いてほしい。ただ、チラシを置いてくれるところが、なかなかないという意見がありました。例えば町内会の掲示板だとかというと、なかなか少しハードルが高い。その辺に関しても、例えば区として何か基準みたいなものをつくって、ある基準に合致するところに関しては、公的な掲示みたいなものができるといいねというような話も出てきました。

特に、お互いの活動を知ることが活動同士のつながりであるし、また新しい活動をしたい人たちの社会参加のきっかけになるということで、知ってもらうことが一番。顔を見て知ってもらうということが大事だという形で、意見の集約がありました。

#### (Cテーブル)

Cテーブルでは、「多様な主体の連携が生み出す地域活動の相乗効果」をテーマに話し合いました。冒頭に活動の上で求める支援というものは何ですかという投げかけがあり、端的にお金というお話もありましたが、技能ですとか、知識、単純な人工がほしいというようなお話もあり、皆さん、それぞれ苦労しているところをお伺いすることもできました。

また、コーディネートのスキルを持っていらっしゃる方からは、せっかくなら出口のあるコーディネートをしていきたいという意見をいただきました。そのためには、一人でもがくのではなく、ネットワークをつくる、あるいは皆さんそれぞれの情報をやりとりするために、情報の受発信の限界を克服していくことじゃないかなというような話にも及びました。この情報の受発信の限界の克服が、例えば農と食とのつながりというような形で、具現化されるんじゃないかというような話もありました。

また、人と人とのつながりが、ゆくゆくは、組織と組織のつながりになっていくという話がありました。例えばアマゾンさんと市役所の私が個人でつき合っていて、この後アマゾンさんの誰々と役所の誰々がつき合うことによって、何かが形になっていくんじゃないかと。例えば、多摩川の河川敷でプレーパークをつくりたいというお話をされた夢パークの方もいらっしゃいましたが、場所がアマ



ゾンさんの近くでもありますし、川となれば、その公園の関係、河川の関係もあります、役所との関係。また、子どもたちを遊ばせるのであれば、子ども食堂の方たちというようなつながりが、情報の受発信の上とステークホルダー同士の関係性によってつくられているんじゃないか。まさに相乗効果ということが議論として行われました。

司会：それでは、各テーブルの発表を受けて、全体での意見交換を進めてまいりたいと思います。ここからの進行は、福田市長にお願いしたいと思います。

市長：皆様、どうもありがとうございました。

それぞれに言いたいことがもっとたくさんあって、発言の機会が少なかったという方もいらっしゃるんじゃないかなと思いますけども、すみません、時間が本当に少なくて、消化不良の部分があるかと思いますが、お許しいただきたいと思います。

それぞれの3グループできっかけづくり、つながりづくり、人材発掘、あるいは相乗効果というところでご発表いただきました。

まず、きっかけづくりというところですけども、実際に地域活動をされている皆さんにお伺いしたいんですが、ご自身が始められたきっかけはどんな感じですかね。さっき、チラシを貼らせてくださいとか、あるいはネットのホームページを更新する人がほしいという意見がありましたけれど、新たな人材を発掘するために、あるいは実際にご自身がそこに入ったきっかけというのは、実はそんなに飛び道具じゃなかったんじゃないでしょうか。例えば緒川さんや川瀬さんですと、子どもの行事がきっかけだと。大概是、子ども、学校がきっかけ。さっきの発表もありましたけれども、子どもつながりということで、既に顔の見えている関係のところから発生してきている。江頭さんのところもそうですね。

江頭さん：そうですね。妻がチラシを持ってきて、こういう活動が始まるみたいだよ。参加してみてもどうということ、参加いたしました。実は最初のメンバーはそれが過半数でした。

市長：そうですね。チラシといっても、意外とかなり個人的に渡されるということがない限り、なかなか入り込まないというのが、現実的にはあるかなと思います。ホームページやフェイスブックの広報も、いい活動をしているなということは、伝わるかもしれないけれども、いっしょに活動しようという人が行き着くかということ、意外とそこは顔の見えていないところや、まだ話をちゃんと聞いていないところには入り込まないんじゃないかということ、お話を聞いていて思いました。

今回に限らず、同じように車座集会でみなさんの話を聞くなかで、同じ地域で活動されている方同士でも、お互いの活動を全然知らなかった、この地域にこんな活動があるなんて知らなかったと、皆さん異口同音におっしゃるんです。同じ地域でみなさん積極的に活動しているにも関わらず、不思議なくらいお互いの活動が知られていない。

でもそれって、あくまでも僕の感覚ですけども、チラシやフェイスブックというよりも、もっとアナログな人間関係、顔の見える関係があるかどうかで、本当に人が引っ張れるかどうかと決まってくるんじゃないかなというふうな気がしているんですよね。

そういう意味では、区長からソーシャルデザインセンターの話はありましたが、いわゆる団体同士のつながりを中間でつなげる役ですね。

「こういうニーズがあります」、「こういうことをやりたいです」、「こういうものがほしいです」といったところをうまくコーディネートしてつなげてくれるところというのが、実は地域の中にそんな

なにあるわけではないのではないかと。たまたまいい人にめぐり合ったから、紹介してもらったというケースはありますが、もう少し地域の中でつなげていただけるものはないかなと考えているところです。

そこには、もちろん行政も関わりますが、同じ地域に暮らしている同士がつながるような仕組みづくりというのが必要じゃないかという考えから、各区のそれぞれ特徴を踏まえた仕組みづくりを、各区それぞれで検討していくように全市的に調整しているところです。

ですから、ワークショップでも出ていましたが、気安くちょっと相談したいけれども、どこに行ったらそんなことが解決してもらえるのかといったところがあればいいかなと。

言ってみれば、誰かがコーディネートすることで、同じような活動を、実は隣の町会でやっているの、一緒に連携できませんかねというふうな提案であったり、今までにはない要素として、そこに農家の方を入れてみたらどうでしょうかというふうな話から、木所さんに話が伝わってというような、いろんな連携の仕組みがつかれるんじゃないかなと。だから、もっともっとアナログな関係を作り出すというのが、とても大事じゃないかなと思います。

発表の場が少ないという話がありましたが、発表の場という意味では、リアルな場ですね、こういった場を、活動を知ってもらえる場所は普段も少ないという話がありましたが、竹井さんのところのイトーヨーカドーさんは、こういうスペースが少しあるから、うまく使ってもらってもいいよというふうなお話をいただきました。

自分たちの活動をなかなか広報できない。だけど、チラシよりも現実に、アナログな形で伝えることができるといえるときに、僕、よく役所のイベントでも言うんです。

先週は、農協の梨の頒布会みたいなものがありましたが、今まで農業支援センターですとか非常にクローズドなところでやっていたんですね。でも、せっかくの多摩川梨のことをアピールするなら、人通りの多いところでしてもらったほうがいいということで、溝の口の駅前の自由通路でやりました。そうすると、この地域にはこんな美味しい多摩川梨の生産者たちがいるんだということを多くの人に知ってもらえることができる。

竹井さんのイトーヨーカドーのところには、お客様がいっぱい集まっています。それもこの地域の人たちが集まっているということで、ここのエリアで自分たちの活動を紹介できたら何て素晴らしいことなんでしょうかと。そして、帰りには、ぜひイトーヨーカドーで買い物をしていってくださいというふうな。

先ほどから企業の皆さんからCSRという言葉が、すごい何度も出てきましたが、果たしてCSRでしょうかと、ちょっと思うことあるんです。何か月前に、三浦市の非常に保存されている湿地帯を歩きました。そこを協賛していただいている企業がいらっしゃるそうです。でも、その企業のまとも役の教授が、日本の企業はCSRと言うけど、大体どこもCSRの企業予算はそんなに多くないんだけど、捉え方が間違っていて、この森をCSRということじゃなくて企業の広告として考えれば、実は安いんじゃないのかと。そういうことで、そういう広告として森を使って、お客さんを惹きつけていくと、もっといいんじゃないかと。今、SDGsの取組がありますけど、社会のために何かをするというふうなイメージですと、社会的意義か経済性のどちらかを犠牲にするわけですね。

でも、僕たちの進むべき道は、両方犠牲にしない方法ですね。経済性もそして社会的意義、この両方をどちらも両立させるということが、これから求められる社会であるし、まさに私たち全員が取り組んでいるSDGsの社会の考え方じゃないでしょうか。

そういった意味で、企業の皆さんにもそういった形で見ていただきたいし、私たちも、地域活動をやっている人たちも、どうやったら一緒に協働できるかというふうな形で、頭を切りかえていくということも大事なんじゃないかなというふうに思いました。

実は、ワークショップの中で、菜の花ダイニングの佐藤さんが、何が必要ですかという投げかけに、お金ですというようなお話がありました。それに対して、アマゾンの山本さんは、お金というダイレクトなものというのはすごく難しいですねと。全国16カ所ある地域でも、そういった現金をぱっと渡すということというのは、効果が見えにくいんですと。ですから、そういう形での支援というのは難しいですよと。だけど、違う方法はありますよねというふうな形で、いろんな議論がなされていました。

本日は、お互いの置かれている立場だとか、どういうふうになれば、本当に交わることができるのかということを知る、大きなきっかけになったのではないかと思います。そういう意味では、今日初めてこういう活動が地域の中にあるんだという方も多くいらっしゃると思いますし、なるほど、こういうものの考え方は、こういう見方をされるんだと、ちょっと自分たちの思っていたことの角度を変えると、また違う視点が出てくるということに気づかれた方も多いいんじゃないかなと思います。ちょっと今、私がわっと話してしまいましたけど、せっかくですから何か私に対するご質問だとか、ご意見などございましたら、少し手を挙げていただけますでしょうか。

平原さん：こういう会に初めて参加させていただいたのですが、高津区内のこういう市民団体とか地域を活性化させるために活動している方が一堂に会せるような会を、例えばこのテーブルが10個ぐらいあるような会になるのかもしれないですけど、定期的で開催していただくと、顔が見える関係というのがつくれるんじゃないかなと思いました。

また、二子新地に駄菓子屋さんがあるんですが、そこが物すごく大きな掲示板をつくっていて、みんな勝手に自分の活動のチラシを貼れる場所があるんです。例えば竹井さんのところのイトーヨーカドーのどこか大きな壁をつくっていただいて、自分の活動のチラシを比較的敷居を低い形で貼れるようにしていただいたらいいのかなと思いました。

私の活動などは、なかなか公的なところに置いてもらえなくて。川崎市の教育委員会の後援をもらって小学校でチラシを配布してもらえるとというのはあるんですが、何かそういう場所をつくっていただけるといいなと感じました。

市長：ありがとうございます。

この掲示板のことについて、相談に乗ってもいいよという方、誰かいらっしゃいますか。

これは、多分何らかのハードルがあるんでしょうね。これは、今行政でも、例えば区役所や学校でなかなか難しいというのは、営利なものは役所のところでは貼れませんよというところの理由があるということですよ。

でも、恣意的な判断であってはいけないという課題はありますが、個人的には、こういった少し営利であっても、こういう角度で見たらどうなんだろうと思うことがあるんです。

同じように、今呼びかけていただいた中では、ぱっとは手が挙がらなかったですけど、もう少し広げてみると、もしかしたら手が挙がる場所も、うちのところだったらいいよと言ってくださる方がいらっしゃるかもしれません。

だから、そういう意味では、どんどんいろんなところに出ていくということが、新たな発想を生み出すきっかけになるのかなというふうなことを思わせていただきました。

西さん、どうぞ。

西さん：意見として二つあるんですけど、社会的処方話の中で、人と人をつなぐ役割をする人が必要だと話させていただきました。社会的処方という仕組みの中にも、さっき自分の例の中では、医師が直

接地域資源と患者をつなぐという例を出しましたが、実際の仕組みの中では、相手をつなぐリンクワーカーという人がいて、医者が仮に地域資源を知らなくても、リンクワーカーを紹介する仕組みになっています。リンクワーカーは、地域資源のことをすごくよく知っていて、あなたにとって必要な地域資源はこれだよというふうにつながれるという職業の人がいるんです。だから、そういった人たちを作っていくというのは一つかもしれないですが、市民同士が、私自身はあなたに必要なかはわからないけれども、あなたに必要なものを知っていそうな人を知っているとかの情報を、お互いが口コミで、アナログ的につなげ合っていく。それをソーシャルデザインセンターだけじゃなくて、市民一人ひとりもみんなリンクワーカー的に働く社会というふうになっていくと、すごくつながりが広がっていくという意味で、すごくいいんじゃないかなと思ったのが一つです。

もう一つが、誰かがこれをやりたいと言ったときに、それを実現できる場とか雰囲気というのが川崎の中で実現されていくということはすごく重要だと思っていて、それはできませんではなくて、例えば、せせらぎ公園をプレイパークにしたいというのがあったときに、それは市役所のあれだから、いろいろ手続が必要で難しいんですよねじゃなくて、それを実現していくためにはどういうふうなことをやっていったらいいかもしれませんとか。アマゾンさんに協力してもらって、広告費を入れてもらうという、単なる寄附じゃなくて広告費として入っていくことによって、パークマネジメントみたいなかんじで進めて、子どもを入れていって、どんな河川敷をつくったら、すごくおもしろいことになるんだろうかというかんじで、わくわくするようなかんじで取り組んでいって、規制を撤廃していくみたいなかんじにしていくと、実現感が出てきて、このまちというのは、手を挙げたらみんなが応援してくれて、難しい問題というのを撤廃していけるんだというかんじになっていくと、みんな自分がやりたいことに手を挙げていくと思うんです。それがまたつながっていくと、いいまちになっていくんじゃないかなと思います。

市長：本当にすばらしいコメントありがとうございました。

ちょうどお昼に、いっぱいある要望のうちの一つで、ある団体からのフードバンクの取組をもっと市で応援してほしいというふうな話がありました。それは、企業であったり、個人であったりから、賞味期限が切れる前のものを供出していただいて、困窮家庭に届けるとかというふうな仕組みをやっている団体が幾つかあるんですけれども、そのときに、私はこういう話をさせてもらったんですね。今、子ども食堂をやっている団体というのは、市内で三十七、八カ所できています。そこも先ほど佐藤さんおっしゃっていただいたように、食材をどうやって確保するのかで困っていると。確かに活動の趣旨としては、フードバンクの取組と子ども食堂の取組は、違うんだけど、そこはもう少し調整してもいいんじゃないかなと。

佐藤さんの話の中では、子ども食堂の中でもネットワーク化されてきたというお話がありました。だから、今私たちは要らないけど、ほかのところでは必要かもしれないというような形で、いろんなものをシェアしていく。情報もシェアしていくし、物もシェアしていくし、というふうな関係ができていくと、それが子ども食堂だけじゃなくて、もしかしたらフードバンクと一緒になれば、もう少し緩くなるのかなというふうな形になれば、何となく活動の幅が広がっていく。「私のないものがこっちにある」「こっちの団体では足りないけど、自分たちはあるよ」というのが、さっきのスペースの問題であったりというふうな形で、お互いシェアできたりするんじゃないかなというふうに思いました。ぜひ、せっかく縁あって、この高津区に住み、あるいは働いていただいている方々なので、ぜひ、さっきの西さんの社会的処方じゃないですけど、みんながこうやってつながっていくというふうな意識を少しだけ変えるだけでも、いろんなつながり方が出てくるんじゃないかなというふうに、今日も思わせていただきました。

ぜひ、こんな取組をどんどん広げていただいて、高津区はもちろんのこと、市内のそれぞれのところでリンクが増えていくと、いいまちになっていくのではないかなというふうに思います。

さっきの岡田さんの話では、岡田さんは10年前に川崎に引っ越してこられたと聞きました。1年前からボーイスカウトの活動を始められたというふうにお伺いしました。そういった意味では、決して、子どもつながり、学校つながりじゃなくても、ちゃんと入って来られるようなきっかけの場というのが、市内あるいは区内の中の、いたるところでできてくると、誰でもウエルカム、誰でもつながれるというふうな形の、まちになってくるのではないかなと、改めていい発見をさせていただいたと思います。さきほど、鈴木副区長がすごくいいことを言っていました。「今日は、お土産はありませんけど、つながりを持って帰っていただけます」というコメントをしていましたけど、本当にいいことを言うなと思って、言葉を借りますけれども、ぜひ今日のつながりをお土産として、さらにいいものをつくり出していくという、そういうきっかけにさせていただければと思います。どうもありがとうございました。

司会：これで車座集会を終了させていただきたいと思います。

本日は、たくさんの皆様にご参加いただきまして、ありがとうございました。